

專務車掌紳士録

市川潔

市川 潔 1924年(大正13)静岡県
生れ。三島鉄道教習所，東京駅駅
長室勤務，東京鉄道管理局「とう
てつ」編集部を経て，現在，日本
国有鉄道厚生局レクリエーション
誌「国鉄」編集部勤務 著書 歌集
「表情」随筆集「鉄道草」現住所
東京都豊島区池袋5の201 国鉄ア
パートDの3号室

専務車掌紳士録

定 価 250円

昭和38年9月20日1刷発行

昭和38年10月25日2刷発行

著 者 市川 潔

発行者 朝日新聞社 浜名二正

印刷所 明善印刷株式会社

発行所 東京 北九州 朝日新聞社
大 阪 名古屋

コンパクト・シリーズ
31

専務車掌紳士録
市川
潔

朝日新聞社

目

次

車掌誕生
電報車掌
愛情車掌
駅弁車掌
改札車掌
スリラー車掌
感激車掌
失敗車掌
被害車掌
鈍行車掌
ユーモア車掌

役得車掌
Gメン車掌
救援車掌
オトメ車掌
ワラジ車掌
表彰車掌
参事車掌
遺言車掌
殉職車掌
二十分車掌
阿房車掌

すれ違い車掌

温泉車掌

詩人車掌

歌人車掌

ニセ車掌

「専務車掌紳士録」と私

― 跋に代えて

中村武志

車掌誕生

■よくぞ！車掌に生れけり

「あなたはどちらにお勤めですか」

とたずねられたり、公式の会に出席して自己紹介をしなければならないときもある。そういうとき、多少ためらったあと、

「……評判の悪い国鉄です」

というと、たいていの人が苦笑か微笑をする。

「国鉄はこの駅ですか」

国鉄というと、みんなどこかの駅員だと思われる。

「いいえ、汽車の車掌をしております」

「ははあ、あの乗車券拝見ですか」

「……………」

何回も経験した問答だ。そのたびに何となくニガイ思いをするのだが、この思いは車掌仲間にか通じないものらしい。

それに世間の人は、車掌の仕事は乗車券拝見をすることだけだと解釈しているらしい。

「おもしろいでしょうね。毎日汽車に乗っていて……」

「とにかく仕事ですからね。おもしろいというよりは……」

「どうです、検札していつかまえますか。さつまの守^{かみ}だとか、キセルだとか」

この人も「さつまの守や、キセル」という意味は知っているが、車掌の仕事を検札オンリーだと思ひこんでいるらしい。

「ええ、このごろはねえ、検札といわなくなったんですよ」

「ははあ、そうですか」

「あれは検察庁のケン、検事のケン、検挙のケンでしょう。お客さんをしらべるといふのはおかしいでしょう。だから、車内改札ということになったんですよ」

「なるほど……」

この人は、鉄道のことに興味がありそうなので、もう少し車掌の仕事をしゃべることにした。

「車掌っていう字はですね、読んで字のごとく車をつかさどるでしょう。検札ばかりじゃないんですよ。それが仕事だったら検札掛か、不正発見掛とでもすればいいんです」

かれの説明によると、車掌の仕事は次のようにいろいろあることがわかった。

まず列車に乗りこむ前に、列車の組成を点検すること。△これは客車掛、車号掛の仕事をつかさどる▽

車内の清掃状況、備品の点検、洗面所の水の有無や、車内温度の調節をすること。△これは駅員、列車掛の仕事をつかさどる▽

ホームに出て旅客の誘導案内をすること。△これは乗客掛、案内掛の仕事をつかさどる▽

発車時刻がくると発車合図をすること。△これは運転掛の仕事をつかさどる▽

発車後は車内で乗越し乗換え、変則乗車の申告を受け車内補充券を発行すること。△これは出札掛の仕事をつかさどる▽

乗客の発着電報をとりあつかうこと。△これは電信掛の仕事をつかさどる▽

そして問題の車内改札をすること。△これは改札掛の仕事をつかさどる▽

「ざっとこういうことが客扱車掌の仕事なんですよ。荷扱車掌の方は仕事の性質が違いますか……」
「そうですか、なるほどたいへんですな」

「これはふだんの仕事で、たいへんなのは何かあったときですよ」

「踏切でダンプカーがとびこんだり」

「ええ、列車が立往生したら、車掌はお客さんとは人種が違うような扱いですからね」

「ふだんのうらみを、車掌さんにぶつつける人が多いそうですね」

「これは局長や総裁の仕事のかわりにあやまるんですよ」

「それはごくろうさんですな、事故のないように気をつけてやって下さい」

検札の話から車掌が激励されるような始末になってしまった。

国鉄の職種は多種多様で、数えてみると三百いくつかあるというが、汽車の車掌はたいがいが汽車が好きで車掌になっている。そのなかのある車掌が、自分の心境を散文詩のようなスタイルで表現していた。

汽車に生きて

汽車に寝て

汽車に食らう

汽車とともによろこび

汽車とともにかなしむ

わたしのすべては汽車

汽車のわたし

わたしの汽車

わたしは汽車とともに行く

これほど汽車に惚れた車掌にも喜怒哀楽があり、車掌のうちにもいろいろな階級や呼び名がある。

車掌区長・助役・指導車掌・客扱専務車掌・荷扱専務車掌・改札車掌・車掌・乗客掛・荷扱掛といったふうで、もっとも乗客に縁の深いのが客扱専務車掌・改札車掌・車掌・乗客掛といったものたちだ。

むかしはひと口に「雲助」といつていたが、いまは細分化されて、雲助の方は乗車拒否をするタキシードの方の人びとに冠せられているようだ。

たいていのお客さんが、汽車のなかではたらく国鉄職員を「車掌さん」とよんでいる。車掌さんとはばれて「客扱専務車掌」が、

「おれは車掌よりえらいんだ」

というような顔はしない。

「オイ、車掌！」

とよばれても、大方の専務車掌は「ハイ」と返辞をしている。

ちょっと旅慣れたお客さんになると、ちゃんと「専務さん」という。「専務さん」とよぶお客さんが、「オイ、車掌！」とよぶお客さんより、車掌にはこわい存在なのだ。

「きょうの食堂車のコックはだれそれだから、あいつの自慢のポークチャップを食ってやろう」

というほどの「通」が多い。車内放送なんかも失敗すると、「専務さん」とよびかけられて注意されてしまう。しかし、この種に属する人びとは、鉄道びいきで腹はあたたかい。

ごくまれに「カレチさん」とよばれることがある。カレチとは客扱専務車掌の鉄道部内の電報略

号で、「カ」はお客さんの「客」を、「レ」は列車の「列」を、「チ」は「長」の意味で列車長ということなのだ。だから「カレチさん」などとよぶ人は、鉄道部内の人間が大部分だ。「カレチさん」とよばれると、車掌はとたんに職業意識をとりもどし、ひそかに警戒するのだ。

△車掌を三年やればバカになる▽

という言葉がある。車掌ならだれでも知っている。鉄道創業以来、車掌仲間で語りつがれてきたからだ。

第一に時間恐怖症になる。

第二に人を信頼しないくせがつく。

第三に胃下垂になりやすい。

この三つを総合して、おれはどうもバカになったのではないかと思うのだ。

時計を見た次の瞬間には、その時計が何時何分を指していたかなどということは、けろりと忘れてしまっているのに、時計を見たことだけに満足するようになるのだ。

発車までの何時間かを休むために、車掌宿泊所があるが、車掌同士でさえ、

「おい、いま何時だ」

ときいた車掌が、

「〇時〇分だよ」

と答えをききながら、それを信用できず、

「ああ、そうか」

といて自分の時計を見なければ気がすまない。自分の乗務する汽車に欠乗することは、一世一代の不覚だからだ。一度、車掌の経験をした国鉄職員は、五年たっても十年たっても列車欠乗の夢におびやかされている。

習い性となった車掌が、バーなどへいって時間を気にしながら女を口説いたところで成功するわけがない。一時間に八回も時計をたしかめた車掌が、

「あんた、そんなに奥さんがこわいの」

とバーの女性に軽蔑されたことさえある。決して女房がこわいのではなく、汽車におくれることが恐ろしいのだ。

ウソだと思ふ人は、今度汽車に乗ったら、車掌のズボンの前にある懐中時計用の小さなポケットをたしかめてみるといい。尻や膝が痛む前に、その小さなポケットのフチはすり切れているか、つけかえて色が変わっているはずだ。すり切れたり色が変わっている車掌の方が職務に忠実だともいえるわけだ。

車掌は、家にいても、車内にいても、時計をサカナにしているから、おかずがいらない代りに胃腸障害を起しやすい。船乗りの壊血病、飛行機乗りの高山病、相撲取りの糖尿病、汽車乗りの胃腸病というわけだ。

時計がサカナでは粗食のカッコミになり、乗務中は揺られどおし、食後の休息时间もないのだから

ら、胃下垂や胃拡張にならない方がおかしいくらいだ。

「ただいまから三十分、車掌の食事時間でございますから、いっさいのご用はおことわりいたします」

と放送したい誘惑を、どの車掌もいだいている。汽車が走っていたら神経を使うから、その三十分間は停車することにしたら、どういうことになるだろうか。

さて「汽車」とは何ぞや、二つの辞書を引いてみた。

金沢庄三郎文博編纂「大辞林」によると、

△蒸気を機関の動力とし、その運転によりて軌道の上を走る車▽

とあり、武田祐吉・久松潜一文博編の「角川国語辞典」によれば、

△蒸気機関車で、軌道の上を運転する車両○陸（おか）蒸気▽

とでていた。明治のも昭和のもどちらの辞書も大して変りがない。これでは汽車が好きだといっても、よほど田舎の支線にいかなければ辞書がいうところの汽車にはお目にかかれなくなった。

汽車に生きて、汽車に寝て、汽車に食らう車掌たちが、それではこまることになるだろう。

ホラ、汽車好きの車掌が発車の合図をしましたよ。発車のベルが鳴りました。

△みなさん、お早くご乗車願います▽

電報車掌

■車内に発着する電報のカナ文字人生

佐藤弘人氏の「はだか随筆」のなかに、電報のカナ書きから生れる誤解について、なかなかこっけいな話がかかれてゐる。

戦時中、海軍の鎮守府から戦場へ出航することになった水兵が、郷里から女房を佐世保へ呼寄せのために、

ハチンタツサセニコイ

と打電した。軍機にふれないよう名詞を簡略にしたためらしい。その電報を受けとった細君は一読して、全身の鼓動をある部分に電撃的に伝えたことだろう。

またある社長が急に先きから旅行を思いつき、

ハシンダ イシヤタノム

という電報を秘書に打った。あわてふためいた秘書は医者をつれ、とるものもとあえず社長の